

日本初！手で触って鑑賞する葛飾北斎。 健常者が見ても発見いっぱいの本が完成。

NPO法人視覚障害者芸術活動推進委員会で、目が見えない人に日本画の魅力を知ってもらうために、手で触って鑑賞できる本を作るプロジェクトに取り組んだ。日本で初めてとなる葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」の触察本は、いくつもの工夫が施され、2012年7月に発行となった。

「視覚障がい者にも ロダンを鑑賞する権利がある」。

東京渋谷区にあるギャラリーTOMは、これまで数多くの手で触れる彫刻などを展示してきた。「目が見えなくてもロダンを鑑賞する権利がある」という視覚障がい者の一言から生まれた美術館である。この美術館に長く携わってきた副館長の岩崎清さんは、この考え方を絵にも敷衍させるため、新たにNPO法人視覚障害者芸術活動推進委員会を立ち上げた。「手で触れて鑑賞する本=触察

本」の発行が最大の目的である。

岩崎さんは「健常者と視覚障がい者では同じ作品でも鑑賞のしかたは違います」と語る。

たとえば花瓶であれば、健常者はその造形や色彩などに目がいく。しかし、手で触れるとなると、指先はまず花瓶の裏側の面に触れることになる。花瓶の口の内部も、外側と同じように鑑賞する。

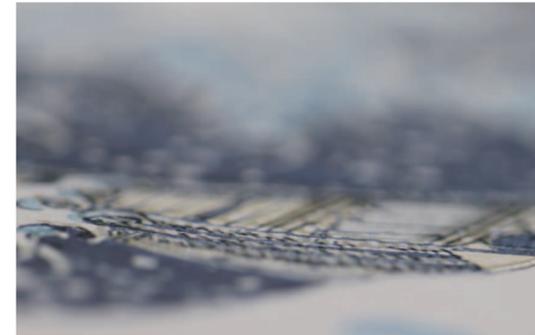
立体物ならそうした違いだけで済むが、平面の絵を説明するとなるとそう簡単ではない。

遠近感を表せないからだ。単純な円のラインであれば説明もつくが、それがいくつにも重なれば、ラインは円の集合を表しているのか、雲のような形のものなのか判断ができない。

「視覚があれば、陰影や色の違いでわかりますが、視覚障がい者にはそれがありません。それをいかに伝えるかが最大のテーマでした」と岩崎さんは語る。



今回制作した「手で見える北斎」の試作ページと表紙



誌面は特殊なインクで印刷され、よく見ると凹凸わかる



視覚障がい者でもわかりやすいよう各所で工夫がされている

その解決策を探して、岩崎さんは資料を集めた。国内にはなかったが、ヨーロッパにはいくつかの触察本があり、またデザインのヒントになる資料も見つかった。

一方、最初に触察本にする絵は葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」と決めた。大胆でダイナミックな構図は世界の美術にも大きな影響を与え、西洋で「ビッグウェーブ」という名で親しまれているもっとも有名な絵画だからである。

見えないところまで見せる工夫を施す。

表現するのはわずか1枚絵だが、触察本は何ページにも及ぶ。1ページ目は、構図の左側の大きな波の部分である。その他の余計なラインは一切いれない。もっとも印象的な部分のアウトラインをまず確認してもらうのである。

触察本は盛り上がる特殊なインクで印刷される。その凸ラインを手でなぞれば、ビッグウェーブの大きさや形がわかる。

次は波間に見えている富士山だ。富士山はすぐ手前の押送船（おしおくりぶね）に一部隠されているが、船はカットして富士山のアウトラインだけを表現する。このようなパーツごとに形を覚えてもらうのだ。

最大の工夫どころが、その押送船である。実際の構図では、三艘の船はそれぞれ波に隠れているので全形は見

担当者より



念願の触察本は
完成して感無量です。

NPO法人
視覚障害者芸術活動推進委員会
代表

岩崎清さん

研究まではできていたのですが出版する資金がなく、ずっとあためておりました。このたびAJOSCの助成により念願がかなう言葉もありません。こうした面では日本は遅れておりますが、これを機会に障がい者が芸術に触れられる環境が増えることを願っています。

えていない。これを船の形とわかるようにするため、岩崎さんたちは葛飾北斎が残したデッサンを研究した。幸いにも北斎はデッサンの多い画家で、さまざまな角度から見た押送船のデッサンも残されている。

「それを元に復元しました。それだけではなく、認識率を高めるために奥の船の船頭たちの数を減らすなどの工夫をしています」と岩崎さんは解説する。

左上の写真を見ていただくとおわかりの通り、大きな波に乗り上げるようにして進む船の様子がはっきりとわかる。この触察本では見えていないところまで見えるので、健常者が見ても興味深い内容である。パーツ毎に見ていくと、今までとは違う絵の魅力も見えてくるようだ。

色についても独自の表現を施した。波の色の濃い部分は密集したドットで、薄い部分は粗いドットで表現したページを設けている。

こうして部分的な形状を把握した上で、最後に全体像を見せるページが現れる。先に学習しているので、もうパーツがまざってしまうことはない。

「校正段階でさわった視覚障がい者の方からは、わかりやすいと好評を得ています」

完成した本には付録としてテキスト解説と音声ガイドCDが付き、図書館や関連施設に提供されるほか市販もされる。売れ行きがよければ、それを元手に早く次の作品にとりかかりたいというのが岩崎さんの願いである。